

認知症とは

認知症とは、いろいろな原因で脳の細胞が損傷を受けたり、働きが悪くなることで、認知機能（情報を受け取って分析したり、記憶したり、思い出したりする機能等）が低下し、生活のしづらさが現れる状態を言います。認知症は誰にでもおこりうる脳の病気によるものです。まずは認知症を正しく知り、早期発見や予防（発症遅延、悪化予防）に努めましょう。認知症は早い時期であれば薬物療法や生活習慣、適切な対応（ケア）などにより症状を改善したり、進行を遅らせることができます。早めにかかりつけ医や地域包括支援センターに相談しましょう。

○認知症の種類と特徴(参考資料:「認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント」編著:山口晴保)

アルツハイマー型認知症

大脳にβアミロイドという不要なタンパクが数十年かけて大量に溜まり、神経細胞を死滅させ、脳が萎縮して起こる病気です。もの忘れから始まり、少しずつ進行します。認知症の原因となる病気のうち最も多く、約6割を占めます。



レビー小体型認知症

異常なタンパクがレビー小体として大脳などの神経細胞に溜まると神経細胞が障害され、幻視（人や動物、虫などがリアルに見える）、幻聴、レム睡眠異常行動（夜中に大声を出す、動き回る等）や手足の震え、筋肉の硬直などのパーキンソン病様症状、便秘や起立性低血圧、失神等の自律神経系の症状が起こりやすくなります。初期にはもの忘れが目立たないことや、症状の変動が大きいことが特徴です。

脳血管性認知症

脳梗塞、脳出血、脳動脈硬化などのため神経の細胞に栄養や酸素が行き渡らなくなり、その部分の神経のネットワークが壊れて、意欲が低下したり、損傷された部位により、運動障害などの機能障害を起こします。脳の血管障害を起こさないような予防が大切です。

前頭側頭型認知症

大脳の前頭前野を中心に脳が萎縮して発症します。初期にはもの忘れは目立ちませんが、怒りっぽい、ルールを無視した行動をとるなど、性格の変化が目立ちます。また同じ行動や言葉を繰り返す、時刻表的生活を送るなどがあります。



その他の認知症

正常圧水頭症、慢性硬膜下血腫、甲状腺疾患など様々な病気が認知症の原因になります。原因となる病気によっては治療により改善することがあります。これらの病気を見逃さないためにも、早期発見・早期治療が大切です。

若年性認知症

認知症は高齢者だけの病気ではありません。若年性認知症は18歳から64歳までに発症し、もの忘れや判断力の低下など、日常生活や仕事など通常の生活が難しくなる病気です。仕事でミスが重なる、段取りがうまくいかない、今まで普通にしていた家事ができないなど、「何かおかしい」と感じることがあれば、早い段階でかかりつけ医や相談機関、地域包括支援センターに相談しましょう。

若年性認知症支援相談窓口 ☎ (0836) 58-5950 県立こころの医療センター内
月～金 8:30～17:15 (土日祝日、年末年始を除く)



一人一人が認知症を正しく理解し、認知症の方を暖かく見守り、認知症になっても安心して生活を送ることができる地域をつくりましょう。